

13. 筋骨格系・結合組織の疾患

文献

井上基浩、中島美和、糸井恵、ほか. 腰痛に対する鍼治療と局所注射の比較-ランダム化比較試験- 日本温泉気候物理医学会雑誌 2008; 71(4): 211-20. 医中誌 Web ID: 2008333712

井上ら. 腰痛に対する鍼治療と局所注射の比較-ランダム化比較試験- 日本生体電気・物理刺激研究会誌 2008; 22:1-6. JA0806. 医中誌 Web ID: 2009099690

1. 目的

腰痛に対する局所注射と局所鍼治療の臨床効果の比較

2. 研究デザイン

ランダム化比較試験 (RCT)

3. セッティング

明治国際医療大学附属病院整形外科外来、京都、日本

4. 参加者

2006年4月～2007年12月までに受診した腰痛患者で、腰部に鍼治療・局所麻酔注射の経験者、運動器障害以外に由来する腰痛の合併が疑われる者、研究開始1か月以内に腰痛に関して他の治療を受けた者を除外した26名。

5. 介入

Arm 1: 鍼群 (13名、男性6名、女性7名、平均年齢70.8±9.3歳)。ステンレス鍼 (0.18×40mm、セイリン社製) を患者の自覚的 maximum 痛み部位 2-5 か所に 10-20mm 刺入、患者が得気を得た後、雀啄術 (1Hz、20s) 行い抜鍼。週1回、計4回治療。

Arm 2: 局所注射群 (13名、男性8名、女性5名、平均年齢73.6±5.5歳)。25G注射針 (0.5×25mm、テルモ社製) を患者の自覚的 maximum 痛み部位 2-5 か所に 10-20mm 刺入、薬剤 (ネオビタカイン®、ノイロトロピン®) を注入後に抜針。週1回、計4回治療。

6. 主なアウトカム評価項目

痛みのVASを初回治療前後、毎回治療前、治療終了2週間後、4週間後に評価。Roland Morris Disability Questionnaire (RMDQ) を治療前、治療終了後、治療終了2週間後、4週間後に評価。Pain Disability Assessment Scale (PDAS) を治療前、治療終了後、治療終了2週間後、4週間後に評価。

7. 主な結果

治療による経時変化パターンは、いずれの評価項目においても、Arm 1、Arm 2とも有意な改善を示した (VAS、それぞれ $P<0.0001$ 、 $P=0.0156$ 、RMDQ、それぞれ $P<0.0001$ 、 $P=0.0188$ 、PDAS、それぞれ $P<0.0001$ 、 $P=0.0196$)。治療直後には、両群ともVASが有意に改善したが (それぞれ $P<0.0001$ 、 $P=0.0428$)、VAS変化量はArm 2に比べArm 1で有意に大きかった ($P=0.0348$)。また、治療の継続による効果に関しては、VAS変化量 (治療前と4回目治療前との比較) はArm 2よりArm 1で有意に大きかった ($P=0.0076$)。RMDQとPDASの変化量 (治療前と治療終了後の比較) でもArm 2よりArm 1の方が有意に大きかった (それぞれ $P=0.0024$ 、 $P=0.0039$)。

8. 結論

高齢者の退行変性に伴う腰痛に対して、局所注射より鍼治療が有効である。

9. 鍼灸学的言及

鍼治療は物理的刺激のみで、局所注射は物理的刺激に加え麻酔を併用する。2群の効果の相違は、痛みの抑制機構の違いに起因すると考えられ、痛みの種類や程度によっては物理的刺激単独がより有効に働く可能性があると言及している。

10. 論文中の安全性評価

記載なし。

11. Abstractor のコメント

本研究は、腰痛に対して西洋医学的治療である局所注射と鍼治療を比較検討した興味深い内容である。評価項目には信頼性の高いものを用いており、評価結果も適切に記載されている。本研究の対象者の年齢が70歳以上となっているため、退行変性以外の腰痛を含む全ての年代の腰痛に本結果が該当するかに関しては本研究のみでは言及できない。RCTの質の点では、サンプルサイズの事前計算や参加者のマスクの結果など改善を希望する点はあるものの、腰痛は鍼灸治療で最も多い主訴の一つであることから、様々な角度から引き続き臨床研究を期待する。

12. Abstractor

七堂利幸 2011.9.11